

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中野支部
機関紙「みらい」
NO. 4417
24年1月23日(火)
Tel・Fax 095-828-1953
文責 支部書記長

今年を労組再生元年に

二〇一〇年に中国に抜かれ、近々インドにも抜かれる予想だ。GDP(五百兆円)の半分は国民の消費力にあるから、それだけ、国民ひとり一人の経済力が落ちていくことを示す。

おはようございます。

一月も終わる。正月の元旦の新聞記事の中で一番気になったのが、日経新聞の「経済大国の転落を止めよ」である。企業家の新聞であるが、この危機感本物か。

日本のGDP(国民総生産)は一九九〇年代に世界第二位で世界総額の二〇%弱であった。それが去年はドイツに抜かれ、世界第四位、比率は四%で最盛期の二割弱だ。

デフレが三十年続き、実質賃金は下がりっぱなしだ。諸外国は大幅にアップしている数値を見るたびに、日本の企業、資本家の認識は、今日の危機を見ていかなかった。

並行したのは企業内留保金(五百兆円)の

激増であり、この金は当然働く人にも支払われるべき金であった。働く人が毎年ごとに貧乏になり、非正規雇用という二重格差の賃金、身分格差がそ



の貧困の根っ子にあることは間違いない。企業と資本家の富の独占が今の危機の元がある。

それと同時に進行して、転落の理由は国の人口減がある。現在の二億二千万人が毎年八十万人も減り続け、二〇五〇年には一億人を切る予測だ。年間二六〇万人が生まれた団塊の世代が亡くなる十年後にはさらに人口は激減する。

GDPの四位への転落は低賃金と人口減にある。人口減は国民の貧困にあるから、

二つは一体だが、これを解決するカギは、労働者と労組がたたかい、この社会を正常化するところにある。

非正規格差の

二重賃金をなくし、だれでも納得できる雇用にするために、労組がストライキでたたかう。いま世界中で続く、労働者の反乱は、この行く手を示す。私たちがこれに続こう。

今年を労組・労働者再生元年にしたい。

*** ** *

今年がオリンピック・

イヤーだ。近代五輪は平和の祭典ともいうが、第一回のギリシャに続き第二回は一九〇〇年にパリ五輪が開かれた。しかし



そのわずか十四年後に第一次世界大戦が起きる。とても平和の祭典ではなく、現代国家は過去の古代五輪の

歴史に学んでいない。

有史では古代オリンピックは紀元前七七六年から始まり、約千年間で三九三回も続いた。無論この間は平和でもなく、ギリシャの各都市国家は相互に戦争に明け暮れていたが、少なくともこのオリンピック期間中の前後の三ヶ月間は戦闘をやめ、選手たちの身の安全を保っていたという。

現代のオリンピックの華はマラソンだが、古代のそれにはなかった。で

はなぜ近代の五輪が始まったのか。それは世界最古の歴史書の「歴史」(ヘロドトス)に「アテネとペルシア戦争」にマラトンの戦争」に起源が書かれている。

当時としてはギリシャ連合国家軍とペルシアの戦争は世界大戦的であったが、両軍がマラトンの丘で対峙する。劣勢を免れないギリシャ、アテネ軍は、最強の軍、スパルタ軍へと援軍を要請の伝令を走らせる。



「歴史」によれば、このマラトンの戦争の司令官の弟は、かつてオリンピックの四頭立ての戦車競争で三度も勝っているが、一度は勝ち馬を相手に譲り、その功績で戦争がとまり、和解をもちしげた人ともいう。まさに平和の祭典の、これこそという史実ではないか。見習うべし。平和の祭典。

この距離、二〇〇キロを走ったのがピリッピデスという飛脚であった。しかし結局、スパルタ軍は応援に間に合わず、アテネ軍は自力で対戦し、ペルシア軍を打ち破る。敗走のペルシア軍は残りの軍船を海路アテネへと走らせる。これを見てアテネ軍は陸路の四〇キロを強行軍で走り帰り、ペルシア軍に迎撃し勝利する。

これが当時の歴史書に書かれた史実だ。同じな



仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員希望者全員に正社員化を。

ゆれば、均等待遇、なげんご差別ー

ユニオンは労契法裁判に勝利するぞー